第十九

157
107
1

紀元二千五百九十二年版

奥山

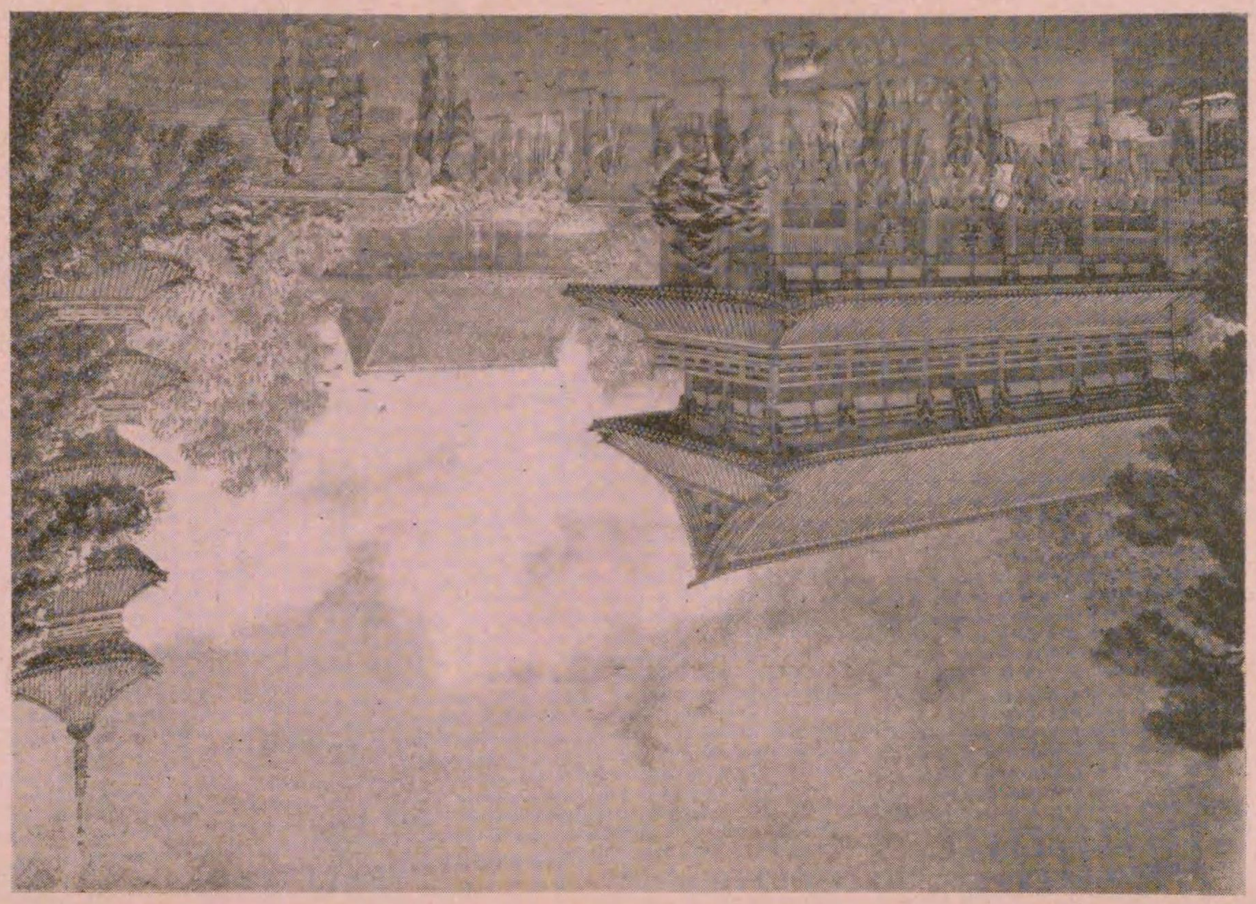
第十九

奥山會刊行

磯谷紫江氏

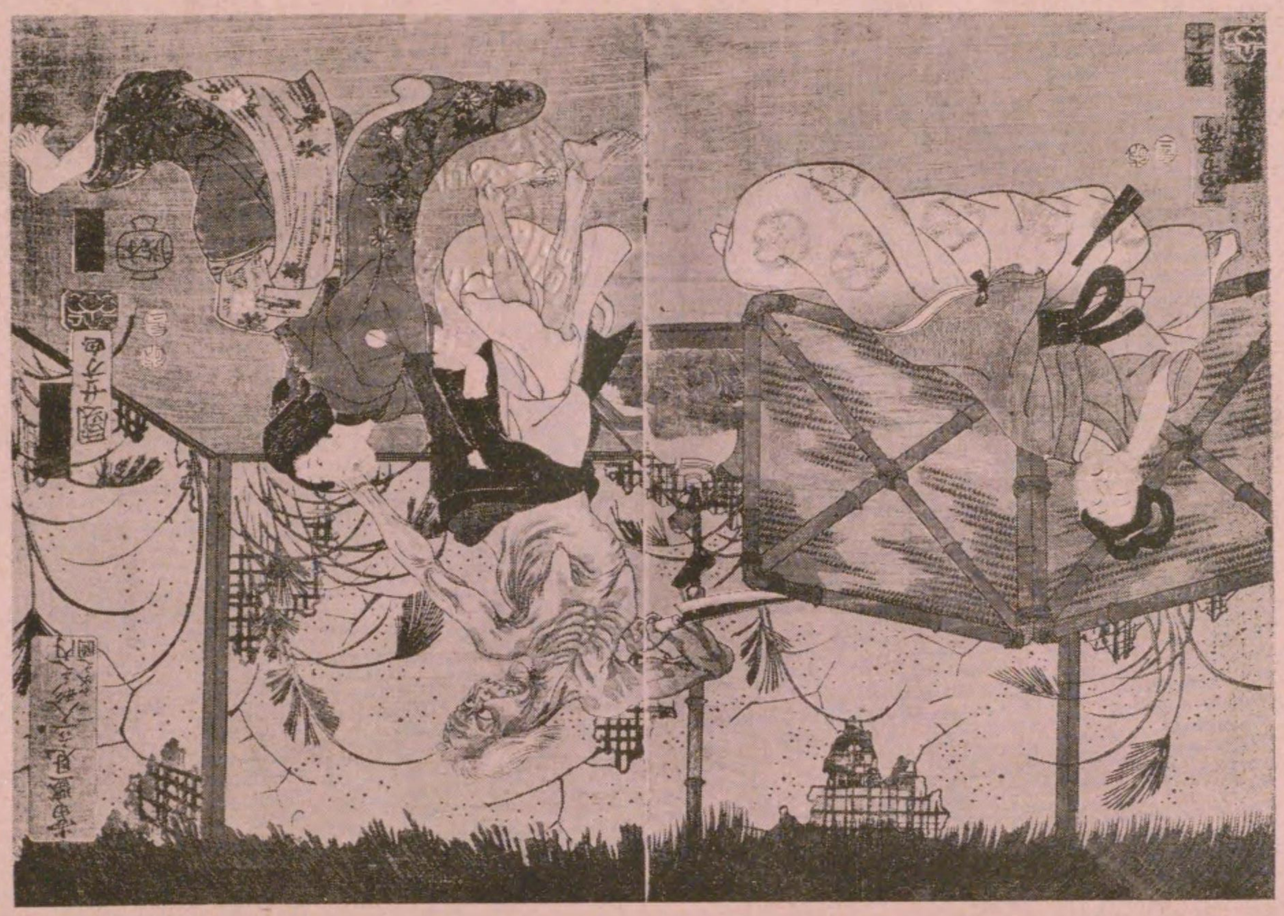
昭和九年六月一日

(鶴原石)圖之景觀寧錦京東



第三
第十七
滿日學生社

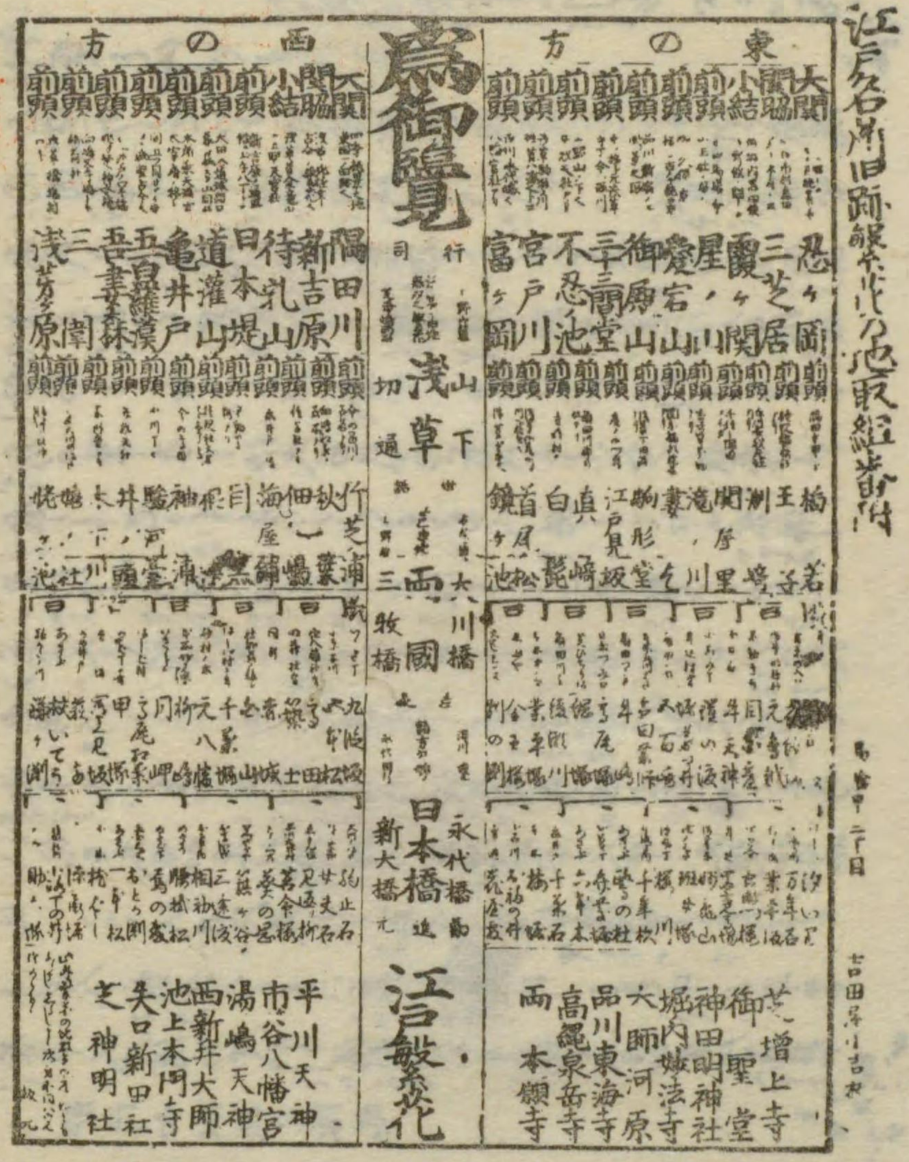
集延周・圖之覽遊園公草淺



畫秀國・國之家ゥ一内之形人文見世當

於竹如来之縁起

當寺へ入来侍りて則湯殿山にて七日詰て大日如来の霊験を
すゝみ入り縁をもとめけれバ名は[illegible]にことを申しよ布る
住ける八個円光かゞやき落ち信仰僧[illegible]して生伝し
けるに住をえ大日如来の所持の金像也今人中に仏体見出
此まゝにても武州江戸大伝馬町佐久間氏へ奉公して身持[illegible]一つの
也納ひとすしもあはれと一身も肉身は如来なりと
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
東都[illegible]
[illegible]



下總佐原行

寂星庵主人

早朝と云ふのに両國驛は混んでゐた。避暑に海水浴に、集まつた人々は思ひ思ひの樂を抱いて改札口へと消えて行く。近代建築の偉容を誇る新両國驛も、雑踏と騒音に暫しが間は打ちひしがれるかと怪しまれるのであつた。一ト列車出て稍落ちつき、第二の騒ぎに移らうと云ふ頃、後苑莊が見えた。同行の筈の永江伯は定刻過ぎても、さらに姿を現はさないので汽車に乗りこむことにする。

見送り下さつたXさんに挨拶して席に着くと程なく發車、それから市川あたりまでは滿目伸び行く大東京のすつとうしい狀だけで、都會人には何の感興も齎らしては呉れなかつた。もろもろの工場とその各々の煙突、よしんば其の上に秩父連山横たはり白扇倒にかゝらうとも何かあらん。まず面白くない風景だ。後苑莊と話がはずむ。主に日光見物のこと、Xさんのこと、第一回佐原行とN嬢(?)のこと。とかくするうちに千葉についた。此處で驛辨を求め朝飯を認める。佐原まで後二時間餘だ。

丘と野と林と川とをゴチャゴチャ寄せ集めたやうな下總の國、それを大きく西から横切つた東の端に佐原がある。活躍と云ふ氣分のマルデない町、老成しきつた町だ。自動車を走らせてスグ觀福寺に行く。新義眞言宗の巨刹だが、まつたく心持のよい境域だ。いつ來ても何度訪れても悪くない。

後苑莊と早速仕事にかゝる。即ち國寶佛像三体の光背銘手拓である。時に永江伯來る。寫眞機を放り出して仲間に入る。三人乱れて打つタンポの音が廣い本堂に響いて景氣よく寺内に徹する。ものはよし、腕はたしかとて忽ち美事な拓本が何枚も何枚も出來上る。たゞ暑いのが閉口だ。蟬の聲が暑い椽側の陽が暑い、ソヨとも動かぬ竹藪が暑い。こうなると八百萬(やをよろず)のものが暑苦しい。序に華曼と磬の拓本もとつた。銘は左の通りである。華曼は同じものが十枚ある。

華曼銘　元和八壬戌年三月廿一日

牧野山觀福寺尊紹上人求之

最上長源院奇進之（奇ハ寄ナリ）

磬銘　清光院德樹眞月爲菩提

施主佐原村伊能權之烝景胤

元祿十四辛巳歳七月吉日

國寶佛像は藥師如來・釋迦如來・十一面觀音・地藏菩薩の四体あるが、在銘青銅光背は、藥師如來を除いた三体に附いてゐる。十一面觀世音菩薩と釋迦如來は、佛名以外は全く同銘文である。

敬白下總國香取大明神御寶前

一奉建立金銅地藏大菩薩一體

一奉讀誦般若心經万卷并觀音經千卷

奉送

香取太神宮御本地四體內

釋迦牟尼如來

右志者爲亡父實政井海雲比丘尼所奉建立如件

延慶貳年大歳己酉三月八日佛□□□陀佛

橋……以下缺損……胤敬白

同大……以下缺損……

右志者爲天長地久當社

繁昌異國降伏心願成就

造立如件

弘安五年壬午八月一日

佛師沙彌蓮願

……以下缺損……敬白

上述の手拓がすむと永江伯は撮影に熱中し、拙庵と後苑莊は小高い墓地へ伊能忠敬の墓碑手拓に馳け上る。もう此の頃から二人とも裸体だ。玉なす汗も形容にならず、眞夏の熱陽を浴びて暑くなつた墓石に抱きついてゐるのだから、流れなす汗は文字通り首から背へ、股から足へ、いや正氣の沙汰ではない。正に狂人と隣り合せの物凄さだ。忠敬の墓碑は前回の紀行にあるから略して、茲にはソノ誤を正して置かう。墓の側面年月は『文政元丙寅之稔四月十三冀』である。亦先妻と後妻の墓がある。

先妻墓

（右側）天明三年癸卯十二月廿九日卒

後妻墓（右側）寛政七年乙卯三月十四日

（正面）淨蓮院成實妙貞大姉

（正面）

研心院妙唱日鏡大姉

（左側）伊能忠敬妻

東都桑原隆朝女

稀世の大學者忠敬も家庭的には惠れず、先妻にも後妻にも先立れ、亦子供も早く失つたのである。忠敬の墓は東京市淺草區源空寺に在るのが本當のもので、此處のは遺髮を埋めたのである。その死するに先だつて師東岡の側に葬れと遺言したことは有名な美談である。源空寺の墓碑銘は孫忠誨が佐藤一齋に賴んで書いて貰ひ、文政五年に建立したものである。

漸く終つて次の手拓に……かけ聲だけはたのもしいが二人とも疲勞はげしく、且暑さにスッカリ閉口垂れてしまつた。伊能魚彦や伊能桐雨や開山塔はじめ多くの古碑を見ると、とても續けてやる勇氣は出ない。何しろ下總有數の古刹而も由緒ある遺物の多いこの寺を一日や二日で片付けることは到底望むべくして不可能の事である。やむなく次回にゆづり二人はあきらめて引き上げることにする。

本堂で冷水を呑み體を拭ひ蘇生の思ひに一息ついて、町から自動車を呼び驛まで飛ばす。驛前で飲んだ氷水はうまかつた。笹川から來た列車はガラあきだつた。時に四時半、さしもに暑かりし眞夏の一日も漸く收まつて、稻田吹き來る風のみ身に泌みて快亦快。

千葉に來て日暮近きを知り、稻毛の海に落陽の照映を認めたのも束の間、ノンストップの汽車はまどろみのうちに夜の東京へ着いてしまつた。両國驛の二階で夕食の御馳走になり、後苑莊は何處へやら、拙庵と永江伯は新高架で御茶ノ水へ。吉祥寺の田舍へ退京し行く永江伯と秋葉原で別れた。

——（ホントウに良い一日を持つたことを後苑莊主人に感謝しつゝ筆を擱く）——

賴山陽百年忌記念

らくがき
又かしの御愛用
又がしの義八日ごろ延引いたし
義はなはだ〳〵お詫申上
又たんざくがき油しあるを
あんじつなどハ
ゑゑ先ゑて出来ハあゆく
此段ハ詫ハ申上ハ
書林 堀町三丁目 深江屋
文泉堂

墓蹟漫談會記

八月十九日(金曜日)曇天、午後六時より瀧野川町中里日月庵藪忠にて第二十六回例會を開く。立秋後十日、山蕎麥の新味も亦激賞に値すれど、前回に出したる當庵の手打冷麥は今正に天下一品なれば、今日再び其佳味を賞翫せばやとの趣向でした。定刻一番乘の鶴岡先生を初とし、殿の○丸宗匠を入れて總勢十一騎。

出席御連名　(著到順)

鶴岡春三郎　今井爽邦　高岸拓川
武村儀市　篠崎寂星庵　加藤隆壽
磯ヶ谷紫江　田口荏庵　辻直
宮音松　西島○丸

今夕は孰も舊い御馴染ばかりにて、新顔の方を交へないところ、全く竹馬の友同然、誰に遠慮も氣兼もなく、昔話に身上話、見聞、體驗、くさ〴〵の奇談を承

り、隨分警戒線を逸したところの――虎穴に入つて虎兒を捉へたやうな……捉へ得なかつたやうな――秘話をも打撤けられ、古筆何某の極め札でも拜見せねば信用の出來ない浪漫的な半世紀前の素のろけ話なども出て、一座は大賑ひでした。

當日の獻立

一御煎茶　御菓子　そばみぞれ
一御酒
一御茶碗　鳥しんじよ　つまみ菜
一御鉢肴　蒲鉾　わさび
一御皿盛　そば瓜　ごまあへ
一蕎麥　田舍そば　茶そば　冷麥
一蕎麥湯
一甘味　そばがきぜんざい
一御番茶

茶菓配膳から蕎麥甘味の味樂世界を通過すると、今度は奇擣妙案に成る御持寄の品々を抽籤によつて配呈、別に珍燐票、愛燐家の雜誌『錦』其他特殊の御寄贈品の分配があり、催主よりは奥山第十五を各位へ贈呈し、それから模擬入札會が開かれた。前回に遜らず珍變不可思議な我樂多數、新物らしいところでは、最近版の堂々たる大出版物が、ロハに近い最低價で引取られるなど、世間はづれの會だけあつて、相場はづれの直段、こゝだけは例外の例外。入札會が早く片付いたので、また一仕切、縱談會に立戻り、興趣津々、時刻の遷移も頓著なく、いつ果つべしとも見えなかつたが、漸う十一時の鳴鐘に人々歸裝を治め、駒込驛まで押出して往つて其處で散會。

七、八、二〇、記

五月三十一日。 自動車にて、和泉へゆく、不在、同一自動車にてもどる。

六月一日。 東京驛より三木氏を訪ふ。

六月二日。 一時すぎ、東京驛より、白木屋へゆく終日氣分あしく頭痛になやむ、めづらしきことなり。

六月三日。 佃にて筑波氏に逢ふ。三木氏をたづねる。まだまだ氣分すぐれず。

六月四日。 三木氏へ、額繪と幾松短册と江の島の錦繪をとどける。

六月五日。 午後、白木屋の古籍展覽會と、黑江屋の新古浮世繪展を見る。（〇七二五）

六月六日。 本所をたづねたれど勘定日とて忙がしくすぐ失禮して、石黑へ、邦文舍に立ち寄りてもどる。

六月七日。 加藤をたづね、夜、拓川氏を訪ふ。

六月八日。 千葉氏をたづね、八時頃戻る。

六月九日。 邦文舍より、對鶴ビルの奄美大島の民謠を聽く。

六月十日。 歸路、新歌舞伎座にて新國劇の一幕見物する。

六月十一日。 巢鴨方面を補助、水道橋より、三木氏を訪ふ。

六月十二日。 午前十時より會議あり、四時散會、五時に、牛込末よしに宴會あり、終つて三木氏を訪ふ。

六月十三日。 石黑より邦文舍へ、夜加藤氏來莊額繪届く。

六月十五日。 三木氏を訪れ、猥談に花咲く。

六月十六日。 新宿驛にて電話をかける、孤村氏來莊。

六月十七日。 第廿四回漫談會を催す會者十六名、會食後寂星庵見え、二三惠孃欠席。

六月十八日。 千葉氏を訪ふ。

六月十九日。 午後五時四氏の送別會を神樂坂『末よし』にて。紀念撮影をする（〇七五一一）

157
107/1

No.

昭和七年十一月十五日印刷納本
昭和七年十一月廿五日發行

『限定壹百部』

禁賣買

不許複製
奥山　第十九

編輯兼發行者　磯ケ谷孝治　東京市杉並區和泉町二四三番地
印刷者　宮西外次郎　東京市麴町區三番町六十九番地

發行所　東京市澁谷川區中里町一五一番地　明元社
印刷所　東京市麴町區三番町六九番地　邦文舍